

「いわつき」の歴史

岩槻周辺の地形は、台地と海が複雑に入り組み、起伏に富んでいたものと考えられています。太古には、海が台地まで迫っていたことを示す貝塚跡が国指定史跡の真福寺貝塚に、さらに弥生時代の集落跡が、馬込、諏訪山遺跡など、谷津といわれる地形の場所に残っています。

平安時代になると武士団が現れ、岩槻周辺は武蔵七党の一族「野与党」の活躍の地となり、その勢力は戦国時代まで続きました。

鎌倉時代には、鎌倉から東北地方へ至る「鎌倉街道奥大道」が通り、要衝の地としてその重要性を増してきました。

「岩付」という地名が文字として現れるのは室町時代に入ってからで、康暦2年（1380）の合戦を記録した古文書に初めて明記されています。

群雄割拠の戦国時代に入り、関東管領（上杉氏）が古河公方（足利氏）との防衛拠点として荒川（現在の元荒川）沿いに長禄元年（1457）頃「岩付城」を築いたとされています。「岩付城」の築城については諸説がありますが、永禄10年（1567）、三船山合戦で太田氏資が戦死するまでは、代々太田氏が城主を務めました。その後は、北条氏が支配するようになりました。

さらに時代は進み、豊臣秀吉は九州を平定するや関東の攻略にとりかかりました。これに対して、「岩付城」の周囲に防御のための「大構」といわれる高さ約4m、幅約8m、全長約8kmに及ぶ土塁を整備したのは天正15年

（1587）頃でした。

天正18年（1590）、秀吉は小田原城を包囲するとともに、関東一円の支城をほとんど攻め落とし、「岩付城」も落城しました。間もなく小田原城は落城、北条氏は滅亡しました。その後、領地替えをした徳川家康が関東を治めることになり、それに伴い、以来徳川家の親藩・譜代が岩槻城主を務めるようになりました。

江戸時代に入り日光東照宮が造営されると、日光御成道が整備され岩槻は



さらに城下町、宿場町として繁栄しました。また、氾濫を繰り返してきた荒川や利根川、綾瀬川を幾度もの大工事によって流れを替え、洪水防御と新田開発を促進し、急増する江戸の人口に対して食糧の供給基地としての役割を果たすようになりました。

江戸時代の長きにわたる国家の安定は、岩槻のみならず各地にいろいろな文化を生み発展させてきました。岩槻の代表的な伝統産業に、人形と組紐があります。人形の誕生には、地場産の桐の粉と日光東照宮を作った宮大工の技が寄与したといわれています。

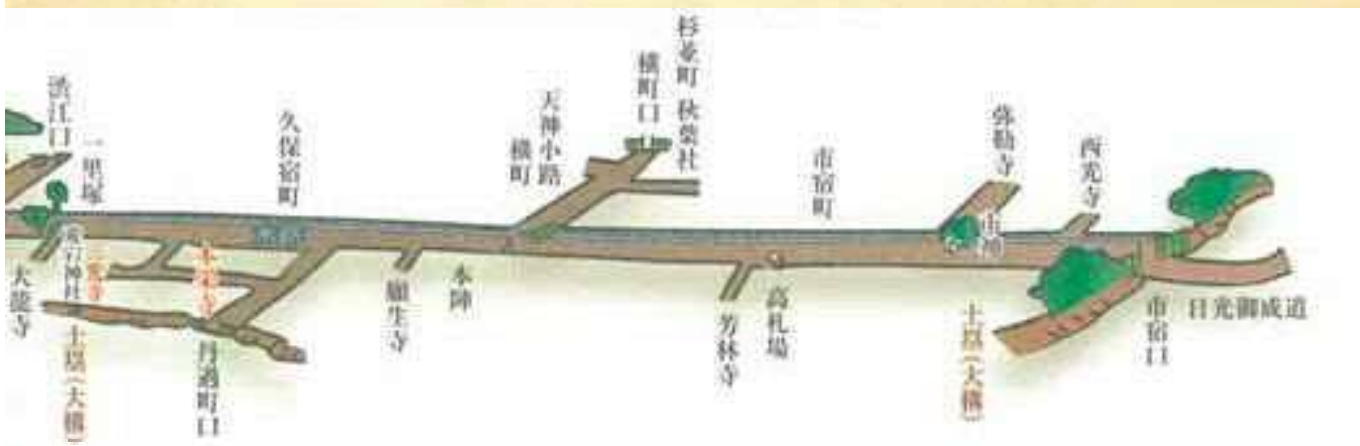
また岩槻には歴代城主による手厚い庇護のもと、岩槻総鎮守の久伊豆神社（宮町）をはじめ数々の由緒ある神社

仏閣が、城下町としての歴史を今に伝えています。

岩槻を表現する言葉に「岩槻にすぎたるものが二つあり、児玉南柯と時の鐘」があります。児玉南柯は遷喬館という私塾を開き子弟の教育に力を注ぎました。後に遷喬館は藩校になりました。

「時の鐘」は、寛文11年（1671）、岩槻城主阿部正春が渋江口に設置し、後に改鑄を経て現在に伝わるものです。その美しい音色は、今でも区民に親しまれています。

明治維新の頃の岩槻藩は、官軍の進入に対して「勤王一途を誓い、国力相応の御用を勤めたい」と上申し、治安維持のための兵を差し出す等、大きな混



上の絵図は、御成道沿の岩槻の町並みが描かれ、町の出入り口には、「大構」が描かれています。
日光道中絵図より（独立行政法人国立公文書館内閣文庫所蔵）

乱はなかったと伝えられています。

その後の廃藩置県においても岩槻がいかに中心的な「まち」であったかを語るにふさわしい話として、明治4年（1871）、府県統合によって岩槻町が「埼玉県」の県庁所在地に定められたことがあげられます。しかし、岩槻町には県庁にふさわしい適切な建物がなかったため浦和町の旧浦和県庁舎に移され、以降、浦和町が埼玉県の県庁所在地になりました。

戦後、地方制度は原則的に国家の統制からはずされたため、各自治体は財政危機を深めることになりました。この窮乏や財政、税制面から小規模町村を救うための合併による改革案「シャープ勧告」を受け制定された「町村合併促進法」によって、昭和29年（1954）5月、岩槻・川通・柏崎・和土・新和・慈恩寺・河合の1町6村が合併し新し

い岩槻町となり、同年7月、県内で13番目の市・岩槻市が誕生しました。

奇しくも全国で13番目に政令指定都市となったさいたま市と岩槻市は合併協定を経て、平成17年（2005）4月1日に合併しました。これにより人口約118万人の新生さいたま市となり、岩槻は、さいたま市岩槻区としてスタートしました。

区民がこれまで培ってきた「人形のまち」「城下町」としての歴史や文化、そして豊かな自然など固有の貴重な財産は、さいたま市が目指すさいたまらしさを醸成するために一役を担うものと期待されています。



岩槻城

岩槻城は、北から東にかけて荒川が流れていて天然の堀となっていました。台地と堀や沼が入り組んだ地形を巧みに利用し、城が築かれていました。

舌状台地の中央に本丸を設け、その東に二の丸があり、これらを中心に茶屋曲輪、天神曲輪、樹木曲輪、竹沢曲輪、武具蔵などの諸曲輪からなり、その西に三の丸があり藩主や家老を中心とした藩士の居宅が並んでいました。

この三の丸に大手門があり、この門を出ると武家屋敷が南西方向と南東方向に延びていて城下へとつながっていました。